

The International Neuropsychological Society mid-year meeting 2012 参加報告

大久保 街亜

International Neuropsychological Society は、脳と行動の理解を深めるため、神経心理学者のコミュニケーションを促進する目的で1967年に設立された。神経心理学は、脳と行動の関連を探る学問である。その一方で、外傷や血管系の疾病により脳に損傷をうけた患者のリハビリテーションやQuality of Life に貢献するという現実的な要請に対応することが求められる分野でもある。すなわち、基礎と応用の双方の側面が密接に結びついた心理学が神経心理学である。そのため、International Neuropsychological Societyは、通常の学会組織と異なる役割も担っている。通常の学会組織は、大会を開催したり、論文誌を発行したりして、学術的・科学的なコミュニケーションを促進する。もちろんこのようなコミュニケーションの促進を担う役割は、International Neuropsychological Societyも有している。しかし、実践的・現実的な要請に「も」応えるという神経心理学の学問的特徴から、International Neuropsychological Societyは、実践家に対する教育の役割も併せて担っている。実際、この学会が主催する大会への参加は、神経心理士の認定に必要な研修として認められる（日本にこの資格はないが、ヨーロッパ、北米には神経心理士の国家資格や公式登録制度がある）。筆者が参加した今回の大会でも、大会参加の証明書が参加者全員に配布された（図1）。図1に示したように、この証明書によれば、ノルウェーからの参加者は今回の大会へ参加することで、32時間の研修に相当するとのことである。このように、学術的なコミュニケーションと専門家の教育という2つの役割を担うのがInternational Neuropsychological Societyの特徴である。

今回筆者が参加した大会は、Mid-Year Meetingと呼ばれるものである。International Neuropsychological Societyは、年に2回のMid-Year Meetingを開催する。1回は1-3月に北米で、もう1回は6-8月に北米以外で開催される。今回は、ノルウェーのオスロで開催された。そのため、11th Nordic Meeting in Neuropsychologyとの合同開催の形式



図1 大会参加証明書

をとった。開催会場はオスロの王宮近くの旧市街そばに位置するRadisson Blu Scandinavia Hotel, 開催期間は6月27-30日までの4日間であった。

開催地であるオスロはノルウェーの首都で、サイズは小さいながらも、美術館・博物館からショッピングセンターまでが揃う北欧有数の都市である。産油国であり、経済的にも豊かであるノルウェーの国情を反映して、交通機関なども整備されており、訪問者に優しい都市である。都市部では、どこでもほぼ問題なく英語が通じ、この点でも大変助かった。



図2 オスロの町並み

古くからの町並みと最近の発展が合わさったオスロの街はなかなか面白い作りをしている。オスロの町並みの写真を図2に示した。なかなか雰囲気のある町並みである。中世から続く町並みのためか、道路がきわめて複雑だ。まっすぐな道が少ない。しかし、サイズが大きくはないので、迷ったとしてもたいしたことはない。そのような点でも過ごしやすい都市である。

今回の大会には“The changing brain”というテーマが掲げられた。臨床的な神経心理学における介入は、脳の変化に対する対応ととらえることもできる。また、近年、脳科学、神経科学の最大のテーマである脳の可塑性は、変化する脳の物質的・機能的側面に対応するであろう。また、乳児から成人への発達にも当然脳の変化が関わってくる。このように神経心理学や神経科学の幅広いトピックをカバーするテーマで今回の大会は開催された。

筆者は、この大会でポスター発表を行った。“Leftward attentional biases in Framed-line Test among East Asians”と題した発表は、疑似無視の文化差について検討したものであった。疑似無視とは、視野の左側への注意分配が過剰になるバイアスのことを指す。右半球の損傷により、その反対側視野への注意分配が行われなくなるという半側空間無視の症状に着想をえて、疑似無視と名付けられた。これまでの研究から、西洋人は幅広い範囲に注意を向けることが知られており、その逆に東洋人は狭い範囲に注意を向けることが知られている。このような注意分配の文化差の影響を今回の発表では検討した。多文化主義を標榜し、様々な国からの移民を受け入れるノルウェーの国柄を反映してか、文化差に対する興味は参加者間でも高く、今回の発表では多くの質問やコメントを受けた。それらに基づく議論は大変生産的なものであり、今後の研究の発展にとっても大変有意義なものとなった。